

令和6(2024)年度 病害虫発生予報 第3号

令和6(2024)年6月21日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

高温性の病害虫の発生増加に注意しましょう。

予想期間6月下旬～7月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稲 いもち病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**平年並**
- (2) 根拠 ・ 向こう1か月の気温は高く(-)、降水量は平年並(±)。
・ BLASTAM(6月中旬)では、一部の地点で感染好適条件が連続して確認された(+).
- (3) 対策 ・ 葉いもちの初発時期(6月中下旬)以降、ほ場をよく見回り、早期発見に努める。
・ 発生が見られる場合は、ダブルカットフロアブル(RACコードF:16.1、24)等、予防・治療効果のある薬剤を散布する。
- (4) 備考 ・ BLASTAM(いもち病発生時期予測システム)の情報、薬剤感受性検定結果を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 水稲 縞葉枯病(ヒメトビウンカ媒介)

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**平年並**
- (2) 根拠 ・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は平年並(±)。
・ 6月第2半旬までの黄色粘着板への成虫の誘殺数は平年並(±)。
・ 大麦におけるヒメトビウンカの密度はやや少ない(平年比42.6%)(-~±)。
・ 大麦におけるヒメトビウンカ第一世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルスの県平均保毒虫率(5月中旬)はやや低い(平年比39.4%)(-~±)。
- (3) 対策 ・ 昨年発病の多かった地域では、本田期防除を実施する。
- (4) 備考 ・ 県内の保毒虫率は低下傾向であるが、コシヒカリなど縞葉枯病に抵抗性を持たない品種を作付けした常発地域では、被害の発生に注意する。
・ 令和6(2024)年度植物防疫ニュースNo.4を当センターHPに掲載中。

3 いちご(親株・育苗) 炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**多い**
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量はやが多い(ほ場率：平年比129%、株率：平年比400%)(+)。
向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は平年並(±)。
- (3) 対策 ・ ほ場をよく見回り、発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
・ 水滴の飛散等で伝染するので、できるだけ水の跳ね返りのないかん水を行う。
・ 発病してからの防除は困難なので、ベルコートフロアブル(F:M7)等を定期的に散布するなど、予防を主体とした対策を行う。
- (4) 備考 ・ 病害虫防除対策のポイントNo.21、薬剤感受性検定結果を当センターHPに掲載中。

4 トマト コナジラミ類(黄化葉巻病(TYLCV))

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**多い**
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量は多い(ほ場率：平年比323%、葉率：平年比220%)(+)。
向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は平年並(±)。
- (3) 対策 ・ ウイルスを媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部(出入り口、側窓、天窗)に0.4mm目合以下の防虫ネットを展張し、特に出入り口は二重にする。
・ 黄色粘着板の設置により、コナジラミ類の早期発見に努める。発生が見られた場合アニキ乳剤(I:6)等を散布する。
・ 黄化葉巻病の発病株は耐病性品種であっても伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
・ 黄化葉巻病の耐病性品種であっても、本病に感染すると伝染源となるため、感受性品種と同様に適正な防除を行う。
- (4) 備考 ・ 病害虫防除対策のポイントNo.22、薬剤感受性検定結果を当センターHPに掲載中。
タバココナジラミは黄化葉巻病(TYLCV)だけでなく黄化病(ToCV)も媒介するため、適切な防除を行う。

5 野菜類・花き類 オオタバコガ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ フェロモントラップへの越冬世代成虫の誘殺数は多い (+)。
・ 現在の発生量はなすで多い (+)。
・ 向こう1か月の気温は高く (+)、降水量は平年並 (±)。
- (3) 対 策 ・ 新しい食害痕や虫フンを目印に早期発見に努める。
・ 施設は開口部に5mm目合以下の防虫ネットを展張し、侵入を防止する。
・ 幼虫は果実や花らい、結球部に食入するため、こまめにほ場を見回り、食害痕や虫フンを発見したら、プレバソンフロアブル5 (I:28) (トマト・なす・キャベツ等) やアニキ乳剤(I:6) (いちご、トマト、なす、きく等) 等で速やかに防除する。
- (4) 備 考 ・ 摘除した果実や脇芽に幼虫が寄生していることがあるので、ほ場内に放置せず、適切に処分する。
・ 発生ほ場では、土中に残る蛹を殺すため、栽培終了後に十分耕耘する。
・ 令和6(2024)年度植物防疫ニュースNo.5を当センターHPに掲載中。

6 りんご 斑点落葉病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は多い (+)。
・ 向こう1か月の気温は高く (+)、降水量は平年並 (±)。
- (3) 対 策 ・ 定期的に予防散布を行い、発生が確認されたらナリア WDG (F:11, F:7) 等を散布する。

7 果樹類 果樹カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 6月第3半旬までのチャバネアオカメムシ越冬世代成虫の誘殺数は多い (+)。
・ 本年のスギ・ヒノキ花粉量は昨年比で少ないため、餌となる球果がカメムシの発生量に対して少なく、果樹園への飛来が増える可能性がある (+)。
・ 向こう1か月の気温は高く (+)、降水量は平年並 (±)。
- (3) 対 策 ・ 夜間の気温及び湿度が高いと予想される日には、日没以降にカメムシ類が多く飛来するおそれがあるため注意する。
・ 4mm目合以下の多目的防災網で園全体を被覆し、被害を防止する。
- (4) 備 考 ・ 山林に隣接したほ場や、過去に被害が大きかったほ場では特に注意する。
・ 令和6(2024)年度病害虫発生予察注意報第1号を当センターHPに掲載中。

8 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
いちご	ハダニ類	平年並	やや多	なし	黒星病	やや少	やや少
	うどんこ病	やや少	やや少		シンクイムシ類	多	多
トマト	葉かび病	平年並	平年並		ハダニ類	平年並	やや多
野菜類	アブラムシ類	やや少	平年並	きく	ハダニ類	やや少	平年並
	ハスモンヨトウ	平年並	やや多				

○施設栽培の病害虫

- ・ トマト、きゅうり、いちご等の施設栽培では、栽培終了時にハウスの密閉蒸し込みを行うなど、施設内の害虫を野外へ「出さない」対策を徹底しましょう。特に、コナジラミ類はトマト黄化葉巻病(TYLCV：タバココナジラミ)やトマト黄化病 (ToCV：タバココナジラミ、オンシツコナジラミ) を媒介し、ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病(MYSV)を媒介するため、注意が必要です。

○うめ・もも・すもも等 クビアカツヤカミキリ (特定外来生物)

- ・ クビアカツヤカミキリが樹木に寄生すると、幹や枝から、レンガ色でうどん状のフラス (幼虫が排出する、木くずと糞が混じったもの) が大量に排出されます。うめ、もも、すもも等の樹木からフラスが出ているのを見つけたら、農業総合研究センター防除課まで御連絡ください。
・ 令和6(2024)年度植物防疫ニュース No. 3を当センターHPに掲載中です。

○かんしょ サツマイモ基腐病

- ・ 本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和6(2024)年6月現在、全国35都道府県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。
・ 健全な種苗の導入及び発病株の早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。
・ サツマイモ基腐病に注意!を当センターHPに掲載中です。

農薬は適正に使用しましょう

- 4月～6月は「春の農作業安全確認運動」、6月～8月は「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。
- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。
- 化学農薬の抵抗性の発達を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

1か月気象予報（予報期間6月22日から7月21日 6月20日気象庁発表）

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10	10	80
降水量	30	40	30
日照時間	40	30	30

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel 028-665-1244）までお問合せください。

病虫害情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧になれます。